

あなただけ今晚はプロデュース Part.2

Medicine — 薬 —

(一九九二年)

## 【人物】

男1 (田村・夫／四十代後半)

男2 (カンちゃん／七十代半ば)

男3 (川上俊一郎／小学二年生)

女1 (田村・妻／四十代半ば)

女2 (杉山せつ／七十代前半)

女3 (稲垣亮子／小学三年生)

第一話 コフドロップス（のど飴）

チンツ・・・。

エレベーターが開く音して、明かり入る。

10階建てのマンションの10階のエレベーターフロア。

女1（留袖姿） ドタドタと駆けてくる。

女1

あッ。

女1、慌てて“下”ボタンを押すが、ドア閉まってしま  
う。フロア表示ランプ下へと点滅してゆく。

女1

・・・いっちゃった・・・。

男1（ブラックスーツに白ネクタイ）、小さな紙を手  
にぶつぶつ言いながら来る。

女1

ねえ、あなた、階段で行きましようか。

男1

（懐からフィニッシュを取り出しシュツと一吹きして）

女1

あー？（フィニッシュはしもうがまだ懐を探っている）  
なかなかこないわよ。今いっちゃったばかりだから。  
（フロア表示ランプをみあげて）いちいち止まってる。

男1

ん・・・（探している）おい、台所のテーブルの上に出  
し  
といた、このくらいのビニール袋どうした？

女1 え？

男1 このくらいのビニール袋だよ。

女1 知りませんよ、そんなのなかったわよ。

男1 ないはずない。ちゃんと昨日の夜、セットしといたんだからッ。浅田飴パッション、ハーブキャンディ、南天のど飴・・・各三粒ずつ、合計九粒。そこで九という数は縁起が悪いからと思ひ、パッションをもう一粒足しておいた。(懐に手を入れ) お？

女1 あったんでしょ。

男1 (出して) これはうがい薬だ。ちよつと取ってくる(行くこうとする)

女1 もう来るわよ。

男1 ……。(ちらとフロア表示ランプをみあげ、小さな紙を広げ、ブツブツやりだす)

女1 (バッグからコンパクトを取り出し化粧を直し出して) 夜中まで練習してたのにまだ覚えられないの？

男1 いや。覚えてはいるんだけどね。

女1 なら、どうして持ってきたのよ。

男1 覚えてはいるんだよ。だけどホラ(コホンと咳をしてみせて)ね、何かの拍子で忘れちゃうということがあるだろう。リズムが狂うというのかな。お前だつてあるだろう？

女1 ないわ。

男1 ……。(コホン) まずいなあ。駅前の薬屋、今日は休みだよなあ。やっぱり取つて来る(行くこうする)

女1 あなた。

男1 なんだ？

女1 もう来ます。

男1 開けて待っててくれ。

女1 (きつぱりと) 来ますから。

男1 ・・・。

女1 ねえあなた。

男1 え？

女1 五階の杉山さん、知ってるでしょう？

男1 あ？・・ああ。杉山さんがどうかしたのか？

女1 あのおばあちゃん。今朝、電話したのになかったのよ

ね。ホラ、あたし、ボランティアやってるでしょ。

男1 そんなの始めたのか、お前。

女1 言ったじゃないの。あたしと川上さんと稲垣さんの三人がひと組みで、近くに住んでるひとり暮らしのお年寄りの緊急連絡係をやってるって。杉山さんのおばあちゃんに何かあると区の福祉課から電話が入るわけ。電話が来たらすぐにおばあちゃんのお家に駆けつけることになってるのよ。

男1 ふうん。なんで三人一組なんだい。

女1 ひとりじゃ、留守してる場合があるじゃない。三人揃って留守ってことはめったにないし。一応、時間割りも決まってるのよ。

男1 時間割り？

女1 ええ。月曜から金曜の朝七時から夕方五時までが稲垣さ

んで、それ以外が川上さん。あたしは土日。

男1 じゃ、お前、今日、係の日じゃないか。

女1 そうなの。都合の悪い時は、福祉課に連絡することになってるんだけどね。

男1 したのか？

女1 ううん。

男1 いいのか。出かけて。

女1 だって、稲垣さんは、毎週土日には、伊豆のセカンドハウスに行くって決まってるし、川上さんはあたしたちと同じで結婚式でしょう。代わってもらえないもの。だから、あたし、今朝、一応おばあちゃんに電話してみたんだけどね、何か変わったことはありませんかって、聞くうと思って。

男1 いないのか？

女1 そうなのよね。あのおばあちゃん、世話が焼けてね。おとなしくしててくれないのよね。

男1 ふうん。出歩くのか？

女1 うん。よくわかんないんだけど。そうみたいなの。

男1 元気ならいいじゃないか。そんなに心配しなくても。

女1 でも、もし、なんかあったら、あたしの責任みたいじゃない。結構、面倒なのよ。

男1 そういう面倒なのがボランティアってやつなんじゃないのか。

女1 そりゃ、そうかもしれないけど・・・。

男1 いやならやめればいいじゃないか。ボランティアなんだ

から。

女1 ええ。でも……。大丈夫よね、今日一日くらい。ね、あ  
なた。

男1 俺は知らんよ。

女1 じゃ、あなたは、あたしだけ留守番しろって言うの？

これ（留袖）わざわざ新調したのに。

男1 いや、そうは言っていないけどさ。……なんだよ、全然来  
ないじゃないかッ。やっぱり……。ト、行こうとする）

女1 あのおばあちゃんちよつと変なのよね……。

男1 え？変？

女1 一度、家に電話がかかってきたことがあるのよ、区の福  
祉課から。おばあちゃんからの緊急ベルが鳴ったので様  
子を見にいってほしいって。それで、あたし慌てて駆け  
つけたのね。でもチャイム押ししても出てこないから鍵あ  
けて……。

男1 鍵？ そんなもの持ってるのか？

女1 そうよ。だって、おばあちゃんが中で倒れてて、応対で  
きない場合だってあるわけでしょ。だから、あたしたち  
三人は、皆な合鍵を持ってるのよ。

男1 なるほど。

女1 で、中に入ったんだけど、おばあちゃん、いないのよ。  
だって緊急ベルが鳴ったんだろ。

女1 そうなの。だから、すぐに福祉課に連絡したら、確かに  
おばあちゃんのベルが鳴ったって。

男1 ふうん。ボケてるんじゃないのか。（表示ランプを見あ

げる)

女1 ボケてるんなら、緊急ボタン押したってことも忘れちゃって、お家にぼんやりといたっていいでしょう？

男1 まあ、そりゃそうだな。(やはり、ドロップスを取りにいこうかと思って、振り向いたりしてる)

女1 だから、いたずらじゃないかって思うんだけど、そんなこと言えないでしょう。

男1 ふうん。人騒がせだな。(表示ランプ見る)

女1 ところがね、あたしだけじゃないのよ。川上さんも稲垣さんも同じ目にあってるの。それもなんべんも。なんだから、からかわれてるみたいで嫌な気分よ。福祉課の人に言っても、埒があかないし。いたずらしないようにって言うてくれないのよね。

男1 じゃ、ほっとけばいいじゃないか。(行く決心)

女1 でしょ？ 誰だってそう思っちゃうわよね。だからあたし、最近、慌てて駆けつけたりしないことにしてるの。やっかいな狼おばあちゃんだな。ちよっと待って・・・

男1 エレベーター、来る。

男1 ……行こう。

二人、乗る。

女1、1Fのボタンと“閉”ボタンを押す。

閉まるドア。

男1、フィニッシュ一吹きして、ブツブツやりだす。

女1、それを横目でちらと見て

女1 (ふんつとして) やったんさいよ。聞いてあげるから。

男1 え？ここで？

女1 そうよ。

男1 (咳払い)・・・えー。

女1 えらそうよ、あなた。

男1 え？

女1 その、えーっての、偉そうに聞こえるって言うてんの。

男1 そうかね。

女1 そうよ。

男1 じゃ・・・(咳払い)

女1 (うんざりして) ほら、また。

男1、さすがにむっとして、女1を見る。

女1、知らん顔をして、髪など直している。

女1 まったくあなたって人は、なにをやらせてもドンくさい

んだから。あたし、冠婚葬祭の時はとりわけそう思っ

ちゃうわ。あーあ、もう少し気のきいた人と一緒になれば

よかったってね。・・・なによ？練習しなくていいの？

聞いててあげるって言うてるでしょうが。

男1 (ちらっと女1を見、咳払い) えー、只今ご紹介にあず

かりました田村でございます。えー、本日はお日柄もよ

く・・・。

ト、突然、エレベーターが「ゴホンッ」と咳払いし、大きくゆれる。

女1

きゃッ！

真っ暗になる。

暗闇の中から・

女1

ちよ、ちよつと、あなたッ。

男1

停電か？

女1

やだ。エレベーター止まっちゃったの!? ちよつとッ、

あなたッ。あなたつたらッ。

男1

どたばたするんじゃないよ。故障したらどうするんだ。

女1

だってッ。あなたッあなた、どこなのッ!?

明かりつく。

女1

あ・・・ついた。

男1

なんだ、びっくりさせるなよ、もう。

お互いを見るふたり。

二人

あーッ!!

女1 男1 (同時に) あ、あなた、ど、どうしたのよ!?

お前、なにふざけてるんだよ。

二人 …?…

女1 ふざけてる? あなたこそ変よ (ト、男1を指す)

男1 お前… (ト、女1を指す)

女1 え!?

二人、慌てて頭に手をやる。頭や体中にイガイガみたい  
なものが生えている。

女1 な…なによ、これッ!?

男1 なんだ、これは。いつの間にこんなもんがくっついたん  
だ?

男1、女1、互いのイガイガをひっぱりっこする。

女1 と…とれないッ

男1 もっと強くひっぱるんだッ。

二人、強くひっぱりあい、同時にずでんつと尻餅をつき  
壁にぶつかる。

エレベーター「ゴホンッ」と大きく咳き込む。

男1 …おい。今、エレベーターが咳込まなかったか?

女1 なんですって!?

男1、そおっと壁に擦り寄って、すりすりしてみる。

エレベーター「ゴホンッゴホンッ」

男1 エヘン虫・・・？

女1 え？

男1 エヘン虫だ・・・。エヘン虫になったぞ、俺たちッ。

女1 な、なんですって!? なに馬鹿なこと言ってるのッ。

男1 そうか。ついに俺もエヘン虫になりさがつたか。そーか

あ。いやはや。

女1 な、なにが、いやはやよ。なんなのよッ、これッ。

男1 まいったね(ト、いいつつも、壁をこちよこちよとやったりする)

エレベーター、咳き込み揺れる。

男1 ・・なんだかおもしろい・・・。お前もやってみろよ。

女1 い、いやよッ。

男1 そうか。おもしろいになあ。

女1 全然おもしろくなんかないわよ。どうするのよあなた。

そうだわ。非常ボタンがあつたでしょ。えーと。これこれ・・・ふふふ・・・あたし、これいっぺん押してみたかったのよね(押す)・・・すいません。ちよつとッ。もしもしッ。

男1 今日は日曜だからなあ。休みなんじゃないか。

女1 そんなッ。非常ベルに休みなんてないはずだわッ。

男1 だいたい、なんなんだあ？んー？ これ押すとどうなんだ？

女1 しらないわよ、そんなの。

男1 なんだ、知らないのか、お前。

女1 だって押したことないもの。だからッ、だから押してみたいんじゃないのッ。

男1 ふうん。このマンションには管理人もおらんぞ。誰が応対してくれるんだ？

女1 そ、そんなのわからないけど、でも、きつとどっかに繋がって、でもって、誰か助けてくれるのよ。

男1 そうなのか？

女1 そうよ。じゃなかったらなんの為の非常ボタンなのよッ  
そりやそうだな。ま、そのうち動き出すだろう。

女1 暢気ね、あなたって人は。もしももしもし。。。

男1 休みなんじゃないか、やっぱり。それに、お前、もし、その誰かっつのが出たとしたって、なんて言うんだい？

女1 そんなのきまつてるでしょ。エレベーターが故障したって言うのよ。

男1 十階の田村ですが、エレベーターが故障して、エヘン虫になっちまりましたとでも言うつもりかい。

女1 そんな。。。

男1 かなり恥ずかしいぞ。

女1 だって。。。

男1 ま、あせっても仕方ない。どれ（ト、紙を取り出す）

女1　なにやっってるのよ。

男1　練習するんだよ。えー、只今ご紹介にあずかりました田村でございます。本日はお日柄もよく、新郎の吉松正行くんと新婦の葵さんは、この度ご良縁あい整い、滞りなく華燭の典をおあげなされました由、ご両親さまはじめ皆様のご満悦いかばかりかと、心からお喜び申し上げます・おい、聞いたか？すらすらできたぞ。

女1　（うんざりして）そうね。

男1　どうしてなんだ？　え？何故だと思う？

女1　しらないわよ、そんなの。

男1　エヘン虫になったからか？ん？エヘン虫自体は咳込まないのか？ん？・おお、そうか。なんだかわかるような気もしないではないな。どう思うお前？

女1　どうも思わないわよッ。とにかくよかったわねッ。やっどすらすら言えるようになって、よごさんしたッ。

男1　なんだ、そのよごさんしたッってのは。へんな言い方をするな。・・ふふ、この調子ならうまく出来るぞ。

女1　ええ。ここから無事に出られればね。

男1　・・・。とにかく、結婚式には行かなきゃならんぞ。吉松は直属の部下だしな。ということはだ、ここから出なきゃならんということだ（フロア表示を見上げて）くそッまだ、止まっていやがるッ。

女1　そうよ。さつきからびくともしないわよ。

男1　（非常ボタンをカチャカチャやって）おいッ、なにをしてるんだッ。誰かおらんのかッ。おいッ。

女1 いないんでしょ、きつと。今日は日曜ですものね。あなたがさつきそう言ったじゃないの。

男1 管理費を払ってるぞ。

女1 きつとさぼってるのよ。日曜日ですものねー。でしょ、あなた。

男1 ……お前と同じだな……。

女1 え？

男1 お前、今日、杉山さんのおばあちゃんの緊急係なのに、サボってるんだろ。

女1 ……そりゃそうだけど……。で、でも、しょうがないじゃないの。今日は特別なもの。

男1 他の人にかわってもらおうように、福祉課に連絡もしなかったんだろ。

女1 そ、そうだけど……。でもッ、それとこれとどういう関係があるのよッ。ボランティアさぼるとエヘン虫になるなんて、聞いたことないわ。ひどいじゃないのッ。あんまりだわッ、あなたッ。

男1 わかった。わかったよ。お前のせいなんかじゃないよ。それにしても……実に妙だな……。

女1 妙なんてもんじゃないわよッ。

男1 おばあちゃんが……。

女1 え？

男1 どうして、いないのにベルが鳴るんだろうな。いや、なんでもないのに、何故ボタンを押すんだろうな、おばあちゃんは。

女1　　そ、そんなことッ。今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょうッ。なによッ、あなただったら、やっぱりあたしのせいにしたいのねッ。

男1　　そうじゃないよ。とにかく、とにかくだ、なにがなんでもここから出なきゃならんぞ。せつかく祝辞がうまく言えるようになったのだ。

女1　　あたしは嫌よ。

男1　　え？

女1　　こんな姿のまま、ここから出るのなんて嫌よ。あなただつて言ったじゃない。エヘン虫なんて恥ずかしいって。

男1　　それはそうだが・・・結婚式に行かない気か？

女1　　結婚式なんて・・・そ、そんな・・・。エヘン虫が結婚式になんか行ける!?

男1　　しかし、招待状を貰った(ト、出して見せて)“ご祝辞を賜りたく存じます”とある。

女1　　そ、それは、に、人間の時に貰った招待状じゃないのッ  
・・・(突然悲しくなって)人間・・・そうよ・・・人間だったのに・・・

男1　　自分で言っ泣くやつがあるか。馬鹿だなあ。あつはっは。まあ、落ち着け。

女1　　あなたッ。

男1　　とにかく、出ることを考えなきゃならない。えーと、非常ボタンがダメとなると、こういう場合どうしたらいいんだ？

女1　　あたしは、嫌だつて言ってるでしょ。こんな姿のまま

人前に出たら、なんて言われると思うのよ。あたし“てんとう虫のサンバ”の“あーかあおきいろのおーいっしようにつーけた”ってところ、下のパートを受け持つてるのよ。

男 1 なんだよ、いきなり。

女 1 披露宴の余興よ。川上さんの奥さんたちと一緒に合唱するの。

男 1 なんだ、お前もそんなこと頼まれてたのか。それじゃ、なおさら、なんとしても出席しなくてはならないじゃないか。それにしてもいい歳して“てんとう虫のサンバ”とはねえ。

女 1 ……こんな姿で歌ったらきつと笑われるわ。

男 1 (見て、吹き出し) そりゃ、笑われるだろうな。いや、受けるかもしれんぞ。ひひ。

女 1 あなたッ。今、あたし、へんじゃなかった？

男 1 え？

女 1 今あたし、音程狂ってなかった？…(歌う) あーかあおきいろのく…やだ。おかしいわ。へんよ。違うのよ(歌う) あーかあおきいろ…おかしいわ。こうじゃないのよッ。ねえッ、あなたッ…エヘン虫…エヘン虫は音痴なのッ!?あなたッ。

男 1 そ、そんなの知らんよ。俺は祝辞がすらすら言えるようになったが。

女 1 あなたのこともなんか聞いてないわよッ…一カ月前から練習してたのよ、てんとう虫のサンバッ。う…うう

(ト、イガイガを引っ張るが、とれない)

男1

やっぱり、この姿で結婚式に行くのはまずいな。しかし

行かなければ、吉松がなんと言うか・・・。

女1

なんというかって、吉松さんは、あなたの部下でしょ。

男1

だから余計、エヘン虫では行きづらい。それじゃなくて

も、最近あいつは俺のことをちよつと馬鹿にしてるとこ

ろがある。しかし、出席しないというわけにもいかない

な。あいつは入社以来ずっと面倒をみてきたやつだし。

女1

ふん。仲人も頼まれなかったのに。

男1

その話は、もういいだろう。

女1

いいえ、よかないわよ。あなた、内心期待してたじゃないの。それなのに、吉松さんったら、川上さんに頼んだ

りして。

男1

俺はその件については、別に気にしてない。

女1

あなたが気にしてなかったってあたしはしてるわ。だって

川上さんご夫婦は、お隣りさんでもあるのよ。気にする

なって方が無理よ。まったくなんだって、あんな人達と

一緒にマンションに住まなくちゃいけないのかしら。

男1

そんなこと言たって仕方ないだろう。ここのマンショ

ンの八階から上は、うちの会社で借りてるんだから。

女1

だからって、どうしてあの川上さんと隣りにならなきゃ

ならないの。だいたい、川上さんとあなたは同期なのに

あっちばかり出世して、どういうわけなのよ。

男1

そんなことを俺に言たって、答えようがないだろうが。

女1

むこうには子供がいるのに、うちはいない・・・。

男1 あそこの坊主、ちよつとここ（頭）をやられてるんじゃないか？ 時々見かけるが、目が、こう、虚ろだぞ。お前、見たことあるか？あれは絶対にへんだぞ。会っても挨拶もしないんだ。だから、こないだ、頭びよびよのぼくーうって言ってやった。あはは。

女1 まあ、あなたって人はなんてこと言うのッ、子供にッ。

男1 いけなかったかな？

女1 いけないわよ。本当に病気だったらどうするの？

男1 本当に病気だと思ったから言ったんだぞ。俺が言ったのが聞こえたか聞こえないか知らないが、こう頭をふりながら、ぴよぴよと応えてた。いいやつだな、あいつ。

女1 何言ってるのよッ。どうせ、奥さんが、なんでもかんでも私立の小学校に入れようと頑張りすぎたから、へんになっちゃったんでしょ、あの子。でも私立に入れようってくらいなんだからたぶん、それなりに優秀なのよね。あたしたちって、なにからなにまで、あの夫婦に負けるのよ。悔しくない？ きっと今日だって、もう式場に行ってるんでしょね。なんてったって、お仲人さんなんだからッ。

男1 頭のおかしい坊主をひとりで置いてか。ふん、いい気なもんだな。

女1 まあ、負け惜しみが強いよね。

男1 俺は、川上のことなど、まるで気にしとらんと言ってるだろうがッ。

女1 うそうそ・・・ああ、悔しい。川上さんの奥さん上のパ

パートを歌うのよ。上のパートの方が簡単で聞き覚えがするのよ。でも、ホントでしゃばりよ、川上さんて。普通お仲人さんの奥さんは余興なんてやらないでしょ。それなのにあの奥さん、学生時代に合唱部だったとかでやらシキっちゃって。いつだってあたしは、損な役ばかり。あなただってそうよ。川上さんて調子がいいから会社でも受けがいいんでしょう。だから、お仲人さんもあっちにいつちやったのよね。それであなたは、お情けでスピーチね。どうせ気のきいたことなんて言えっこないって思われてるわ。あ、だからわざとだわ。恥かせようとしてるのよ、きっと。あたしたちって馬鹿にされてるんだわ。これもそれもあなたのせいよ。あなたがこんなだから、だからだから・・・あたしたちエヘン虫になんかなっちゃったんだわッ。どうするのよ、あなたッ。しかし・・・まったく奇妙なこともあるもんだ。どうだ、お前、気分は。

女1 何言ってるのッ、この人はッ、もおッ！

男1 しかし、考えようによっては、これは実に貴重な体験かもしれないぞ。

女1 なにがよ？

男1 だって、お前。朝晩、なんの気なしに乗り降りしてた、このエレベーターがだ、この第一茜マンションの喉の部分にあたっていたなんて、俺たちだけしか知らないぜ。ふうむ。謎がいつばいだな・・・。

女1 感心しないでちょうだい。そんなことがわかったからっ

てなんの役にたつって言うのよ。

男1 お前みたいな言い方をしては、実も蓋もない。エレベーターで実によかったじゃないか。これがもし下水管だったらどうだ。俺たちはたぶんエヘン虫ではありえない。ゴキブリだったかもしれないんだぞ。これは、俺の想像だが、きっと下水管にまぎれこんでしまった経験のある夫婦もいるんじゃないか？ 川上夫妻あたりはあやしいぞ。そう思わないか、お前。

女1 ふん。そうかしらね。あたしには、川上さんのご主人って、あなたよかずつと立派に見えるけど。

男1 だから、お前は浅はかなんだ。

女1 あら、すてきじゃないの。おしやれよ、あの人。

男1 派手なズボンにワニのアップリケがくつついたシャツのどこがおしやれなんだ。小指の爪ものばしてるぞ、あの男は。実にゴキブリくさいと思わんかね。その点、俺たちはエヘン虫だ。お前、エヘン虫というのを知っているか？ 実在しない虫だぞ。

女1 水虫みたいなもんだわね。

男1 お前は、実に汚い例えをする女だな。いいか。虫というのは鈴虫松虫ばかりをいうのじゃないぞ。虫が知らせる虫が好くなどと言って、なんとなく心を感じることを、我々の祖先は実にうまく表現したのだ。更に、芸の虫などという立派な虫もいるのだ。これら全て、実在しない虫、すなわち人間がその感性のよるところによって生み出した高尚な虫なのだ。

女1 エヘン虫もその一種だって言いたいわけ？

男1 そうだ。

女1 ムシのいい話だね。

女1、着物の裾をはしよりだす。

男1 おい、なにをしてるんだ。

女1 いつまでもこんなとこにいるの、嫌なのよ。天井を開けてちょうだい。自力で脱出しましょう。

男1 天井・・・からか？

女1 そうよ。あなた。肩車してちょうだい。

男1 ちょっと待て。肩車をするのはいいが、俺はどうなる。

女1 あたしが先に天井に昇って、それからあなたを引き上げてあげるわよ。

男1 引き上げるといってもここにはロープもなにもないぞ。

女1 帯をほどくのよ。

男1 なるほど。着物というのは便利なものだな。

女1 そうよ。とにかくここから出て、このイガイガをなんとかしなきゃ、披露宴に行けないじゃないの。

男1 ん・・・いや、待て。

女1 なによ。

男1 危険・・・じゃないか？

女1 そりゃ、危険よ。でも、こういう場合はたいてい天井から脱出するって相場がきまつてるのよ。あたし以前、テレビのドラマで、そういうシーンを見たわ。

男1 いや。俺が言ってるのは、そういう意味じゃなくて。

女1 え？

男1 俺たちは、その・・・エヘン虫なんだから。

女1 ・・・？・・・

男1 外へ出るってことは・・・。

女1 え・・・。

男1 だろ？

女1 ・・外へでると・・・。エヘン虫は外へ出ると・・・どうなるの？・・・ねえッ、あなた、どうなっちゃうのよッ!?

男1 うん。俺の想像があたっていれば、たぶん消える・・・。

女1 なんですって!?

男1 だってそうだろう？ エヘン虫は、虫は虫でもコオロギやセミとは違う。喉頭部で知覚されるだけの実体のない虫なんだから。

女1 そ、そんなッ。いやよ、そんなのッ。あ、あなた、言っ  
たじゃないのッ。エヘン虫は高尚な虫で・・・。

男1 高尚だということと、生命体として強いということとは  
関係がない。いや、たぶん高尚なものほど生命体として  
は弱いかもしれない。ゴキブリがいい証拠だ。

女1 ゴキブリ？

男1 そうだ。ゴキブリはまったくもって現実にはっきりと存  
在している虫だ。知覚によって生まれた虫では断じてな  
い。だから、やつらは並みはずれて強い。すなわち、我  
々が、やつらの存在を認めようが認めまいが、やつらは  
存在している。逆に、エヘン虫や芸の虫、虫の知らせの

虫、虫が好くの虫は、我々の内にある。

女1

お願いだから、そういうわけのわからないことを言っていないで、あたしを肩車してちょうだい。

男1

いやッ、わかったぞ。

女1

わからなくていいから、肩車をするのよ。

男1

唯物論でものを考えるからいけないのだ。それだから、外に出たエヘン虫は消えるなどという発想が生まれるのだ。唯心論でいこうッ。

女1

なんの話よッ。

男1

俺が大学の哲学科を出たのを忘れたのか。こういう時のために近世哲学を学んだのだ。どうだ、たのもしいと思わないか。

女1

体育会系の人と結婚すりやよかったわよッ。

男1

万物の本体は精神である。そして、全ての物質はその現れであるッ。そうだッこれだ。この精神が大切なんだ。

この精神をもってしか、俺たちが生き延びる方法はないぞッ。デカルトも言った。エヘン虫（しっかと胸をたたき）思うゆえにエヘン虫あり、だ。よし、行くぞッ。

女1

・・・待って・・・。

男1

どうした？

女1

確かに、消えるかもしれないわ・・・。

男1

なんだと？

女1

外に出たら・・・あたしたち消えるかもしれないわ。だって、あたしたち、ゴキブリじゃない。あたしたちエヘン虫なんだもの。あたし、エヘン虫なんて虫、見たことな

いもの・・・

男1  
だから・・・

女1、そおっと壁に体をすりよせる。

エレベーター、激しく咳き込み、女1大きくはねとばされる。

男1  
お、おいッ。大丈夫かッ。

女1  
ええ。あやうく飛び出すとこだったけど。よかったわ、迂闊に飛び出したりしたら消えちゃうものね。

男1  
だから、お前・・・

女1  
あなたの言うとおりよ。外に出たら、あたしたち消えるんだわッ。

男1  
いいか、お前。俺の話をよく聞きなさい。確かに、俺もさつきまではそう思っていた。しかし、発想を転換すれば俺たちは消えないですむということに気付いたんだ。

女1  
え？

男1  
いいか。例えばだ・・・そうだ。お前、ちよっと目を閉じてみなさい。

女1  
え？

男1  
いいから、目をつぶれ。

女1  
なんなのよ、あなた。

男1  
つべこべ言わずにッ。

女1  
キスするの？ そんなのへんよ。

男1  
絶対しないから、目をつぶれてんだッ。

女1 ・・こう？（ト、目を閉じる）

男1 何が見える？

女1 なんにも見えないに決まってるじゃないの。

男1 よし。目を開ける。

女1 はい（開ける）

男1 なんが見える？

女1 なんがって、あなたが見えるわよ。

男1 そうだろう。

女1 ねえ、なんなのよ。なんだか馬鹿くさくって気分が悪いわ。

男1 つまり、こうだ。俺という存在は、お前が目を閉じて知覚作用を中断すれば消える。つまり、存在するということとは知覚されているということなんだ。すなわち、目を閉じた瞬間に、この世のものは全て消失し、目をあけたとたんに再生すると考えてもさしつかえないということになる。

女1 さしつかえはないかもしれないけど、それは嘘でしょ？  
男1 嘘じゃない。少なくとも、今は、この考え方を真実だと信じなくては俺たちエヘン虫の存在が危うくなるんだ。

女1 え？・・・どうしてなの？

男1 （苛々して）ええいッ、まったく、お前はなんて頭の悪い女なんだッ。

女1 ええッどうせそうでしょうよッ。

男1 そうだ。お前は馬鹿だ。だが、俺はお前が好きだぞおっ  
どうだッ。

女1 な、なんなの!? それも哲学の一種なの!? いったいどうしたのよ、あなたッ。

男1 俺に同じことを何度も言わせるなッ。

女1 まッ、結婚してから、いっぺんだって好きだなんて言ってもらったことなんかないわッ。

男1 そ、そうじゃないッ。そのことじゃなくて、エヘン虫の原理の話だッ（苛々して）ええいッ、わからない奴だッ  
いいかッ、よく聞け（ト、首を締める）

女1 な、なにすんのッ。

男1 （突然、喉をかきむしり出し）うっ・・苦しいッ。

女1 苦しいのは、こっちよおッ。

男1 （もがき出して）苦しいッ苦しいッ。

女1 あ、あなたッ、どうしたのよッ。

男1 く、くるしくないのか、お前はッ。げほっげほっ。

女1 あなた、しっかりして。

男1 （激しく咳こむ）

女1 あなたッ。エヘン虫が咳こんでどうするのよッ。しっかりしてってばッ。エヘン虫は咳こまないとはいはずでしょ。

男1 そ、そうだッ。俺はエヘン虫だ。それなのに、なんで俺が咳こまなきゃならんのだッ!?

女1 やっぱり、あなた、本当はエヘン虫だって認めたくないのよ。そうなのよ。あなたって無理ばかり言うのよ。嘘つきなんだわ。あたしを好きだっただって嘘よ。そうでしょッ。

男1 こ、こんな時に、なに馬鹿なこと言ってるんだッ。

女1 ほら、やっぱりそうよ。哲学なんかでゴマかしたってだめよ。ちゃんとわかってるんですからねッ。女にはわかるのよ、そういうことッ。

男1 お前は、なんてことを言うんだ。エヘン虫という誇りを持たなければ、俺たちは外に出た瞬間に消えるんだぞ。それでもいいのか!?

女1 よかないけど、じゃ、あんたはなんで咳こむのよッ。理屈にあわないじゃないのッ。

男1 こ、こんな時に、俺を理屈で責める気かッ。ゲホッゲホッゲホッ。

男1、激しくもがく。

エレベーター、激しく咳き込み、大揺れに揺れる。

女1 きゃああッ。あ、あなたッ。

突然、ドア上のフロア表示ランプが色とりどりに点滅し始める。

女1 きゃ、きゃああーッ。故障だわッ、本格的に故障しちゃったんだわッ。ど、どうしようッ。たすけてッ（ト、ボタンをめちやくちやにカチャカチャ押す）

男1 お、おいッ、お前、やめろッ・・・く、くそおッ。エ・・・エヘン虫は負けんぞッ。エヘン虫は実体を持つ虫だッ（苦しむ）・・・お、俺が認めなければ、ゴキブリだって

コオロギだって、あらゆる虫は実体を持たんだ。エヘン虫は消えないッ。く・・苦しい。お、おい、お前、どこだ・・た、たすけてくれッ。

女1  
もう嫌よッ。どうしてこんなことになっちゃったのよッ  
嫌よッ、こんなのッ。

男1  
エ・・エヘン虫は負けない・・。

女1  
あ、あたしは嫌よッ。あたしはエヘン虫なんてまっぴらよッ。エヘン虫じゃなけりやなんだっていいッ。ゴキブリだってなんだってッ。

表示ランプ（赤・青・黄色・・の）、飛び散る。

女1  
きやッ。

男1  
た・・たすけてくれ・・。

女1、飛び散った表示ランプを一粒手にする。

女1  
・・コフドロップス・・。

男1  
・・バカッ。お前、エレベーターを壊す気か。

女1  
あなた・・これ・・。コフドロップスよッ！

男1  
・・え？

女1、あつたじゃないの。持ってきてたのよ、あなた。

男1  
え・・・？

女1、男1の口にコフドロップス入れる。

女1 どう・・・？

男1 ・・甘い・・・。すうつとする・・・。

女1 ほんと？あなた。

男1 ふふふ・・・生き延びてやる・・・ふふふ・・・。

女1 生き延びる？・・・あ、あなた!! あなたッ、待ってッ。

なめちやダメッ!! 吐き出してッ、あなたッ。

突然、ガタンッと動き出すエレベーター。

女1 きゃああッ。

真っ暗になる。

暗闇の中から・

女1 あなたッ!

エレベーター、ガタンッと停止する。

溶明

男1の姿はない。

女1が、茫然とたちすくんでいる。

女1 (あたりを見回し)・・・あなた・・・。

女1、そっと手を開き、慌ててコフドロップスを放る。

女1                   あなたッ・・・あなたッ、どこなの!?!・・・あ・・・。

                          上の方から水の流れる音・・・。

女1                   み・・・水・・・?

                          水音、激しくなり、エレベーターの中まで。

女1、壁にひっついて茫然とする。

女1                   げ・・・げすい・・・?

                          ト、突然、非常ボタンが点滅する。

女1                   (駆け寄り) もしもしッ、もしもしッ!(必死でボタン  
                          を押す)

女2の声               はいはい、今いきますよ。

女1                   もしもしもしもし、助けてッ。下水に、下水に迷いこん  
                          じゃったんですッ。助けてッ。もしもしッ。早くッ早く  
                          助けてッ!!

女2の声               「カンちゃん、ちゃんと流してよお。

男2の声               んー。

女1

・・え・・？

ザアアーツ

女1

きゃ、きゃあああーッ！

暗転。音楽

エレベーター、再び、動き出す。

暗闇の中で、表示ランプ、ゆっくりり下降し5Fで停止。

## 第二話

### プラシーボ（偽薬）

5Fの杉山おばあちゃんの部屋。

女2（杉山）、大きなダンボールを抱えて玄関の方から

やってくる。

女2

まったくもう、近頃の宅配便ときたらドンスカドンスカ

叩くんだから。すぐに行くのに。

男2、トイレから出てくる。

女2

ちゃんと流れた？

男2 うん。

女2 ここ古いでしょう。ゴキブリがのぼってくるのよ。

男2 トイレに？

女2 そうよ。一度なんか、便器の中の水がたまっているとこあるでしょ、あそこでゴキブリが泳いでたことがあるの。

男2 ふうん……。なんだい、せつちゃん、それ？

女2 ああ、これ？（大きなダンボール箱から、様々な栄養剤の瓶を取り出す）ビタミンE。老化防止よ。カンちゃんも飲む？飲むならあげるわよ。

男2 今さらいいやな。

女2 不妊症に効くのよ。

男2 ……せつちゃん、飲んでるの？

女2 もちろんよ……。あら、馬鹿ね。もうとつくにあがったにきまつてるじゃないの。

男2 じゃ、なんで飲んでるのさ。

女2 いいじゃないの。気持ちの問題でしょうが。精子不全にも効くのよ。

男2 ……気持ちの問題……。ねえ……。

女2 そうよ。はい、お持ちさいな（ト、Eの瓶をあげる）

男2 ……。ありがとう。

女2 （次々と瓶を取り出しながら）ねえ、最近、胃の具合はどうなの？

男2 はかばかしくないね。しょうがないよ、半分切ったんだから。

女2 かわいいそうに……。

男2 いいんだよ、もう長くないんだし。

女2 そんなこと言いなさんなよ・・・あ（取り出して）えんめい茶飲む？

男2 あ、うん。貰おうかな。

女2、キッチンの方へ行く。

男2、立ち上がりTVのスイッチを入れようと近づく。

ト、その脇の壁に貼られてある表のようなものに目をとめる。

男2 ・・ねえ、せつちゃん。これ（表）なに？

女2 （魔法瓶を持って来て）カンちゃん、お小水の具合どー

お？

うん、まだあんまり切れがねえ。

そう（急須に湯を注ぐ）

ことぶき健康食品・・・か。効くの？こういうのって。

そうねえ。気持ちの問題ってとこかしらね。

・・気持ちの・・・ね。そうだね（ト、急須から注ごうとする）

あ、もうちょっと待って。二、三分はおかないと。ね。

そうか。

女2 （ダンボールからドリンク剤を二本取り出して）なにかしら・・・これ？

男2 え？

女2 こんなもの頼んでないわよ、あたし。

男2 どれどれ・・アリナミンV。ああ、あれか。

女2 なあに、それ。

男2 TVでやってるやつじゃないか。今はやってる。

女2 そうなの？

男2 ああ。うちの孫も飲んでるよ。元気が出るらしい。

女2 へえ。はやってるの・・サービスでくれたのかしら。

男2 そうだろ。

女2 ・・飲んだことある？

男2 ない。

女2 ・・飲んでみる？

男2 うん、いいけど、胃に悪くないかなあ。

女2 大丈夫でしょう。はい（ト、一本渡す）

男2 うん。

二人、飲む。

女2 ・・へんな味・・。

男2 ・・うん・・。よくこんなもん飲むよなあ。今の若いの

は・・。

女2 ほんと（ダンボールからえんめい茶の箱を取り出す）

男2 （手伝う）ずいぶん沢山買ったんだなあ。

女2 まとめて買わないと送ってくれないのよ。あ、カンちゃ

ん、代金払込用紙捨てないでね。

男2 あ、これ？

女2 そう。

男2

・・せつちゃん。

女2

なあに？

男2

・・これ、払込用紙じゃないみたいだよ・・お得意様各位・・。

女2

え？

男2

“平素より、ことぶき健康食品をご利用いただき、誠にありがとうございます。本日は、ことぶき健康食品株式会社創立十五周年記念、特別サービス期間といたしまして日頃のご愛顧に感謝の意をこめて、お客様の中から厳選なる抽選をさせていただきました結果、貴方様に“アリガテンV”二本をお送りいたしました”・・アリガテン・・・？

女2

アリナミンとかいうのじゃなかったの？

男2

“アリガテンVは、かねてより、一部の好事家の羨望の的でありました中国の秘薬中の秘薬“若々来々（じゃくじゃくらしい）”の成分を、わが社の長年にわたる研究の結果、若々来々とまったく同じ効果をもたらす若返りの薬として開発した新製品です”

女2

若返りの薬!? じゃくじゃくなんとかって・・？

男2

じゃくじゃくらしい。若い若い来い来いって書いてある・・。

女2

若い・・来い来い・・。

男2

“名前も、日頃のご愛顧に深く感謝の意をこめて、ありがとうございます、アリガテンと命名いたしました。お気にめしていただけましたでしょうか”・・た、ただのダジャレじ

やないかッ。

女2 こ、これ、若返りの薬なのッ!?

男2 まさか・・・。

女2 まだなんか書いてあるわ。読んで、カンちゃん。

男2 “尚、お試しにられました結果、ご満足の得られました場合は、引き続きご愛顧賜りたく、重ねてお願い申し上げます。アリガテンV、定価三万円、サービス期間中  
十本入り二十五万円”

女2 これが一本三万・・・。

男2 二本で六万円・・・。

二人、テーブルの上の空のドリンク剤の瓶をじいっと見つめて、暫・・・。

ふうっと溜め息をもらし、視線はそのまま、同時に椅子によりかかる。

男2 ・・せつちゃん・・・。

女2 え？・・・

男2 もう三分、たっただろ・・・。

女2 え・・・ああ（ト、えんめい茶を注ぐ）はい。

二人、空瓶を見つめたままで、えんめい茶を飲む。

男2 あちちっ。

女2 大丈夫？あ、よだれ（ト、布巾で口元を拭いてあげて）

やだ、布巾。ごめんなさい。

男2 い、いやいや。だいじょうぶいッ。あはは・・・？

女2 ……？…

空瓶を見つめながら、茶をすすする二人。

男2 インチキもんだよねえ・・・。

女2 そうよ・・・ねえ？

男2 そうだよ。若返りの薬なんて・・・。

女2 そうよ。若返りの薬なんて・・・。

男2 ……あるって話は聞いたことがあるけど・・・。

女2 え？

男2 いや、だからさ、インチキだろ。

女2 そうよねえ・・・。あたしもあるけど・・・。

男2 え？

女2 だから、そういう薬があるらしいって・・・。

男2 ほんとに？

女2 いえ、だから、噂にね。

男2 ……そうそう・・・。

茶をすすする二人。

男2 中国の方の薬らしいよ・・・。

女2 え・・・。

男2 え？・・・だから、その・・・薬・・・。

女2 あ・・・ああ、そうらしいわね。あたしもそう聞いた。

男2 セつちゃんも？

女2 ええ。

男2 そうか。セつちゃんもか・・・じゃ、やっぱりそうなん

だね・・・。

女2 なにが？

男2 え・・・だから、中国の薬なんだよ。

女2 ああ。そうね・・・。

茶をすする二人。

男2 ・・そろそろ失礼しようかな。

女2 あら、そお・・・。

男2 うん・・・。

女2 用でもあるんですか？

男2 いや・・・別に・・・。

女2 なら、まだいいじゃないの。ね。

男2 ・・う・・・うん・・・。

男2、腰掛け直し、ふとベランダ（※ベランダは、舞台

上には設置されてない。位置としては客席側）を見る。

かすかな花吹雪・・・。

男2 ・・春だね・・・。

女2 ・・そうね・・・。

二人、同時に、ドリンク剤の空瓶に目がいつてしまう。

男2 (ふと) あ、せつちゃん。

女2 え？

男2 (TV脇の表をさして) あれ、なんなんだい？

女2 ああ、あれ・・ね。ほら、ボランティアの人の。

男2 ボランティア？

女2 カンちゃんのご家族と一緒にだからないでしょ、ああいうの。

男2 なんなんだい？

女2 (首にかけていたベルを取り出して、テーブルの上に置き) このベルを押すとボランティアの人が来てくれるっていうの。

男2 なんで？

女2 だから、ほら、あたしが急に具合が悪くなったりしたらこれを押すの。そうすると区の福祉課から回って、近くの奥さんの家に連絡がいくわけ。

男2 へえ。で？

女2 そうするとその奥さんが家に来るのよ。“い”っていうのが川上さんて人。この人は案外真面目にやってるの。でも、いろんなボランティアかけもちしてるらしくて、態度がどことなく事務的なよね。“ろ”っていうのは稲垣って人。この人、最近、お嬢さんを亡くしたの。亮子ちゃんっていう子で、飼っていた犬が、通りに飛び出

したのをおっかけてって車にはねられたんですって。

男2 ふうん・・。

女2 まだ小学生だったのよ。日曜日になると、お掃除にきて  
てね。

男2 掃除？

女2 子供会とかいうので決まってるらしいの。マンションの  
入口を掃いたり、草むしったり。

男2 へえ、いい子だったんだね。

女2 (うなづいて) 稲垣さんの奥さん、一時はノイローゼ気  
味だったって話。まあ、思うところあってボランティア  
を始めたんでしょうけど、最近、面倒臭がってるのが見  
え見えなのよね。口じゃ優しそうなこと言ってるけど。

喉元すぎればってやつかしらね。

男2 そんなもんなのかもしれないな。

女2 “は”は田村って人。

男2 田村って人に×が多いんだね。

女2 そうよ。田村って奥さん、この頃来ない事があるのよ。

男2 へえ。12ってのはなんだい？

女2 電話してから、十二分で来たって意味よ。

男2 ふうん。でも、せっちゃん、こんなに何度も具合が悪く  
なったのかい？

女2 え？(笑って) 馬鹿ねえ。いっぺんだって具合が悪くな  
ったことなんかないわよ。

男2 そうだよね。

女2 そーよ。

男2 だよなあ。あはは。

女2 ふふふ。

男2 ・・いいの？そんなことして。

女2 よかないでしょうけど。・・カンちゃんちに行ってる時に押すのよ、このベル。（ベランダの方を指さして）で向こう側のカンちゃんの家ベランダから見てるの。いつ来るかなって。ほら、あれ（ト、TVの横に吊るしてある双眼鏡を指す）。あたし、かんちゃんちにお邪魔する時、あれ持ってくでしょ、いつも。

男2 双眼鏡で見てたのかい？こっちを。

女2 そう。

男2 ・・そうか・・そんなことをやってたのか（鼻をすする）

女2 そうよ。そのくらいしか楽しみないもの。ひとり暮らしの老人なんて・・。

男2 せつちゃん・・。

女2 ん？・・あら、なによ、カンちゃん。どうしたのよ。

男2 かわいそうに・・かわいそうだよ・・せつちゃん。

女2 カンちゃん・・。

男2 具合が悪くなったら押すベルなんて、悲しいよ。だってそれを押す時は、もしかしたら、死ぬ時かもしれないじゃないか。そんなのあんまりだよッ。

女2 カンちゃん・・。

男2 そうだろ？

女2 そんなふうには考えたことなかったけど・・。でも、そ

ういわれればそうかもしれないわねえ・・・。

男2 そうだよ。それに、こいつなんてなんだよ。×ってのはないじゃないか。手抜きするくらいなら、ボランティアなんてやらなきゃいいんだ。

女2 そうよねえ・・・。

男2 せつちゃんが、あつちから見てるのも知らないで。

女2 そうよねえッ。

男2 馬鹿にしてるんだよ、年寄りのこと。いるんだよ、そういうやつ。俺は、せつちゃんの気持ち、よおつくわかるよ。せつちゃんは正しいよ。

女2 カンちゃん（感動）カンちゃん、お昼、食べてかない？

男2 （鼻をすすりながら）食べてく。

女2 待ってて。今、作る（キッチンへ）

男2 あ・俺、胃、半分だからしつっこいものダメだよ。

女2 （キッチンから）わかってる。

男2 悪いね、いろんなこと言って・・・俺さ、本当は、食事療法ってのやりたいんだよね。だけど、嫁がさ、面倒くさがるだろ、そういうのって。それで、若いの一緒のもの食べてるだろ。だからいつも、このあたりが、もたってしてて・・・。

女2 わかるわかる。

男2 俺は、さっぱりしたものが好きなんだよ、本当は。

女2 生しいたけがあったわ。おうどんに入れるね。あ、しいたけなんて消化悪いわね。

男2 いや・・・大丈夫・・・うどん・・・作ってるの？せ

っちゃん。

女2 そうよ。もうすぐできるから待っててね。

男2 うん・・・(ふと、空のドリンク剤に目がいく) せっちゃん・・・。

女2 んー？

男2 ・・衣つけて、あげて。

女2 え？

男2 しいたけ・・・。なんだか・・・今日は、てんぷら・・・とか

さ・・・そういうのがいけそうな気がするんだ。

(顔を出して) ほんとう？

男2 ああ。

じつとみつめあう二人。

男2 あ・・・あはは・・・。

女2 あ・・・ふふふ・・・(キッチンに消える)

男2、なんだか体中に力がみなぎってきたのを感じる。

手足を伸ばしてみたりする・・・若い・・・。

テーブルの上の空き瓶を見る。

女2、お盆を持って出てきて、テーブルの上の急須や茶

碗、空き瓶を片付け出す。

男2、ふと女2のうなじに目がいく・・・感じる。

思わず、なめまわすように女2を見てしまう。

女2 ？・・なに？

男2 い、いや・・。

女2 今、油、あつためてるから待っててね（行く）

男2 （目で後を追いながら）う・・うん・・。

男2、なんとなく落ち着かなくなる。

男2 せ、せせせせせ、せ・・。

女2 （顔を出して）え？呼んだ？

男2 う、ううううん（ト、大きく首をふる）

女2、にっこりして消える。

男2 ・・かわいい・・せ・・せせせせ・・（ふと股間に目を

やり）せ、せせせせっちゃんツ！ 大変だツ!!

女2 （飛び出してきた）どうしたのツ!?

男2 （慌ててソファに転がりこみ）う、ううんツ、なんでも

ない。

女2 ？・・（消える）

男2 （悲痛）い・・いてえ・・（やっとの思いで立ち上がった）

て）・・ト、トイレ、か、かりる・・ね（ト、トイレに  
かけこむ）

女2、ランチョンマットとナプキン、ナイフフォークを

持って、缶ビール片手に鼻唄を歌いながら出てくる。

テーブルセッティングし、髪をかきあげるとビールを一  
口飲み、テーブルをながめ・・・。

女 2  
・・・てんぷら・・・？・・・

男 2、トイレから出てくる。

男 2  
どうした？

女 2  
ん？・・・ううん・・・。

男 2、TVを付ける。NHKがかかる。リモコンでチャ  
ンネルをかえる。バラエティ番組。

二人、つつたつたまま、ぼんやりとTVをみている。

男 2  
あッ、千堂あきほ。

女 2  
あ、やだあ、嫌い、この子お。

男 2  
・・・え？

女 2  
・・・？

男 2  
・・・あ・・・あはは・・・(ト、腰掛ける)

女 2、テーブルを眺めて、もう一度、？となる。

男 2  
おッ、ほなみちちゃんだ。

女 2  
え？

男2 ほら、ほなみちゃん。

女2 (むっとして) 誰でもいいんじゃない、カンちゃんて。

男2 そんなことないよ、ちゃんと統一性あるよ。

女2 ないないない。やだあ、カンちゃんて。

男2 ・・せっちゃん・・。

女2 きらいきらい。

女2、男2の首の後ろから腕をまわして、イヤイヤみた  
いなこと、する。

男2 (ギョツとするが) なんだよおお (ト、女2の腕をつ  
かんで、一緒にイヤイヤみたいなこと、する)

二人、やや戸惑いながらも、イヤイヤみたいな腕の振り  
だんだん激しくなってきた、止まらなくなる。

男2 あ・・あれツ・・せ、せっちゃんツ。

女2 わツ・・カ、カンちゃんツ。

二人、悩ましくもつれ合う。

女2 や・・やんツ。

男2 と・・とまんねえぜツ。

暗転になってしまふ。

悩ましい時間のおとずれ。

テーブルの上の、緊急ボタンだけが、無機的にチカチカと点滅している。

暫く・・・。

ぼんやり明かりつく。誰もいない部屋。

男2、ド派手なパジャマを着て出てくる。

男2、ソファに腰かけ、けだるい溜め息をもらして、ズリつと腰をずらす。

女2、男2とペアのパジャマを着て出てくる。

男2の隣りに斜めすわりに腰を下ろし、足をくみながら髪をかきあげると、男2の袖口のあたりを指でもてあそんだりする。

男2  
んー？

女2  
うふふふ・・・。

男2  
ばーか・・・。

女2  
・・・ふふふ・・・(ト、まだ袖口をいじくってる)

男2  
よくこんなあったな。

女2  
商店街の福引。五等。

男2  
ひええ、だっせー。

女2  
ふふふ。

男2  
あはは。

女2、男2のパジャマをひっぱる。

男2 ばかあ。よせよ・・よせたら。

女2 うふふふ。

男2 ねえ・・せつちゃん。

女2 んー？

男2 一緒に暮らそっか・・。

女2 え？

男2 あ、なーんちゃって、さ。

女2 ほんとに？・・カンちゃん。

男2 え・・う、うん・・。せつちゃんがよけりや、だけど。

女2 ・・あ、あたし、ここ改装するッ。

男2 え？

女2 ここ、二人で住めるように、あたしリニューアルしちや

うッ。

男2 せつちゃん、ほ、ほんとかよ!?

女2 うん。

男2 金、あんの？

女2 うん。養老保険あるし。

男2 あ、だったら、俺のも使って。

女2 いいのよお、カンちゃんは。

男2 違うんだよ。俺、お墓作ろうと思ってためたのがあ

の。

女2 すごいッ。

男2 息子夫婦が冷たいだろ。だから死んだ女房と俺の分、永代供養にしておうと思ってさ。でもいいや。せつちゃんの墓に入れて。俺、養子になるから。いいだろ。

女2 うん、もちろんよ。あたし、お墓持ってるもん。あのね  
墓石がね、ちっちゃくってかーわいいの。あたしだけの  
お墓よ。あたしさ、姑にめっちゃイビられたじゃん。お  
んなじお墓に入るの嫌だったから作っといたんだ。カン  
ちゃんと一緒に入れるなんてすごくラッキー。

男2 えへへ。ばっちりだな、俺たちって。

女2 うんッ。．．そーだ、あたし、ベランダに家庭菜園作ろ  
うっと。ね、ね、聞いて（ト、軽やかに立ち上がり、ベ  
ランダの方に行く）ここにね、ずらっとパセリとかミン  
トとかあ、えーとそれから．．。

男2 ナスやゴボウもいいよな。

女2 そ．．それは、ちよつと無理かもしれない．．。

男2 あ．．そ、そうだよな、そういうのはよくないよな。家  
庭菜園だもんな、可愛いやつがいいんだよな。たろ芋な  
んかどうだい？可愛いよ。

女2 ．．もちよつと、おしやれなものがいいの．．。

男2 あ、そうか。そだよね。芋なんかだめだよな。似合わな  
いよ、うん、そうだ。

女2 うん（ト、男2の隣りに腰掛けて、肩にもたれかかる）

二人、暫く、満足気にニヤニヤしている。

男2 ねえ．．腹へんない？

女2 うん。ペッコペコだわ。

男2 ピザたのもつか？

女2 あ、いいな。

男2 よし（ト、立ち上がり）デバリデー、な（ト、メニューを探す）

女2 あ、そこそこ・・・カンちゃん、デバリデーじゃなくつてデリバリーね。

男2 うん。あ、あった（ト、メニューを取り出す）

男2、受話器を取る。

女2、リモコンを入れる。

男2 （ダイアルしながら）・・・吉田栄作なんかいいかよお。  
結構好き。

男2 へーえ・・・。あ、もしもし、ピザ・カリフォルニア？第一茜マンションの501の杉山だけどー。

女2 あ、かとうれいこ。きらくい（チャンネルかえる）  
あ、ばか。変えんなよツ・・・あ、こっちのこと。えつとねー、M一枚。トッピングとねー、オニオンとマッシュルームとフレッシュトマト。そんならねーチーズ。え？チーズは付いてるの？あ、ピザだからね。ほう・・・。うん、よろしくッ（切る）いろいろ言っどいた。あははは・・・トッピングって何？

女2 （新聞を見て）WOWOWにしょっか？

男2 お、いいね・・・ワアワアって何？

女2 あれえ？ザーザーいってるう。

男2 貸してみ・・・（ザーザー）受信料払ってるのかよお。

女2 払ってるよ。衛星放送の分もちゃんと・・WOWOWってNHKでしょ？

男2 うん・・(チャンネル変える) あ・・普通の一番はうつる。おかしいなあ。アンテナがへんなのかなあ(ト、ベランダの方に行く)

女2 えー、そーお？(リモコン、カチャカチャ)

ト、その時・・

T V ・・健康ブームの中で、愛知県蒲郡市に本社のある大手健康食品会社が薬事法違反の疑いで摘発されました。書類送検された、株式会社ことぶき健康食品は、創業十五年の業界きつての老舗でしたが・・。

女2 え・・？

男2 何？

T V ・・このたび新発売されたアリガテンVが、摘発の対象となったものです。

アリガテンVは、若返りの薬というふれこみで販売されすでに五千万円にのぼる売上げをあげていましたが、調査の結果、アリガテンVは、成分的には医薬部外品としてあつかわれている清涼飲料と変わりがないことがわかり、一本三万円という高価な値段から、悪質な商法として、厳しく追及されています。

女2

カ・カンちゃん・・。

男2

せ・せつちゃん・・。

男2、突然、くらくつとしてソファにくずれる。

女2

カ、カンちゃんッ！

TV

次のニュースです。

女2、男2（とびおきて）TVを見る。

TV

岐阜県揖斐郡大野町のサクラが開花しました。

ズリツとなる二人。

TV

このサクラの木は高さ七メートルの古木で、一重の花から咲きはじめ、八重、二段咲きと、四月上旬から下旬にわたって同じ木に花を咲かせるという珍しいもので、揖斐の二度サクラとして、天然記念物にも指定されています。以上、昼のニュースをお伝えしました。

ふたり、互いに助け合いながら、やっとの思いで起き上がり、みつめあう。

女2

・カンちゃん・

男2

・せつちゃん・

高らかな鐘の音とともに“のど自慢”始まる。

T V

みなさん、こんにちわ。今日は徳島県××市○○町の敬老福祉会館からお送りいたします。会場は元気なおじいちゃんおばあちゃん一杯です。客席に、○○アナウンサーがいております。○○さあん・

二人、のど自慢が始まった時から、憎しみのマナコで、ずりずりとT Vに近づいて行って、男2、T Vを蹴飛ばす。女2も蹴飛ばすが、これは空振り。  
ゼーゼーする男2。

女2

・・・・あたしったら・・こんなもん着て・・(パジャマをひっぱり)あたしったらあたしったら・・(うずくまって肩をふるわせる)

男2、怒りでぶるぶる震えながらパジャマの上を脱ぎ出す・・が、動作は鈍く、上手く脱げない。

女2

(気付いて)かんちゃん、どうしたの？

男2、やっとパジャマの上を脱ぎ終えて、下に着ていた

ラクダのシャツに手をかける。

女2

かんちゃんツ。なにしてるのツ。およしなさいたらツ  
(ト、とめる)

男2

は、はなせツ(シャツ、脱ぎ捨てる)

女2

(あわてて、男2の裸の胸をシャツで隠し)だめツ！  
・・・大事な・・・だいじな・・・かんちゃんツ！

男2

せつちゃん！

女2、わあつと泣き崩れる。

女2

あたしが、あたしがいけなかったの。かんちゃんのせい  
じゃない。あたしが、あんなもの飲ませたから・・・忘  
れて。忘れましょうかんちゃん。ね、そうでしょう(お  
いおい泣く)

じっと、忍んでいた男2、いきなり女2を振り払う。

女2

ぎゃつ。

男2、ベランダの前に行き仁王立ちして、この声とどけ  
とばかりに言い放つ。

男2

こ、こんな、く、屈辱に屈してたまるかッ！ せ、せつ  
ちゃんも脱げッ!!

女2

ぐええっ?!

男2、裸の胸を突き出して、げんこつでバンバンと叩く

男2

負けんツ。お前らなんぞに負けてたまるかツ。やいッ、馬鹿息子ツ、豚嫁ツ。よく見るがいい。天地開闢（てんちかいびやく）このかた、男子たるもの命果つるとも、この道は滅せず！ 魂魄（こんぱく）ここにとどまっとなお生（お）えたり!! いざ、見ん!!（ト、ズボンに手をかける）

女2

かんちゃんツ。なにをするのツ?! や、やめてえッ!!（ト顔をとおおう）

男2

み、み、見るがいい・・・。

ト、ズボンのボタンをはずそうとするが、興奮してうまくいかない。

男2、キツとして、むこう岸をにらみつける。

男2

く、くそッ・・・見るがい・・・?（フト、目を見張る）

女2

かんちゃん?

男2

・・・見てる・・・。

女2

え?

男2

見てる・・・誰か・・・こっちを見てる・・・。

女2

え?（ト、駆け寄って）・・・息子さんと・・・お嫁さん?

男2

・・・いや・・・。

ふたり、並んで、よく見ようとする。

男2 せつちゃん……。双眼鏡……。

女2 あ……。はい（ト、取ってきて手渡す）

男2 （見て）……。ふたり……。

女2 え？

男2 俺たち……。

女2 え？誰なの？ 息子さんたちじゃないの？かんちゃん。

男2 せつちゃんと俺……。

女2 なんですって？

女2、双眼鏡をとって見る。

男2、茫然としている。

女2 ・・あたし……。あたしと……。かんちゃんがいる……。

男2 （うなづく）

女2、双眼鏡を男2に握らせて、その腕にしかとしがみついて、何か言おうとするが、言葉にならずぶるぶる震える。

男2 せつちゃん……。

女2、動作で「もういっぺん見てみて」

男2、恐々、双眼鏡を覗く。

男2 (双眼鏡を目にあてたまま)・・・いる・・・ふたり・・・

俺とせつちゃんが・・・こつちを見てる・・・

女2 (目をつぶって) つるかめつるかめ・・・

男2 ・・せつちゃん・・・自分を見ると・・・死ぬって話・・・

女2 え・・・？

男2 (双眼鏡から目を離し)・・・もうひとりのね・・・自分を

見てしまうと・・・死ぬって、聞いたことないかい？

女2 ・・かんちゃん・・・

ふたり、ゆつくりと顔を向け、互いにみつめあう。

ト・・・ベランダの下から、子供の声が聞こえてくる。

女2、はっとして覗き込む。

女2 あ・・・

男2 え？

女2 あの子・・・稲垣さんの・・・

男2 え？

女2 いつも日曜日に、マンションの入口のお掃除に来てる子

・・・稲垣さんのうちの亮子ちゃんって子・・・

男2 でも・・・その子・・・車にはねられたんじゃないの？

女2 そう。でも・・・いるの・・・ほら・・・(ト、下を指す)

男2、そっと覗き込み・・・再び静かに、むこう岸に目を

やる。

男2 手・・・ふってる・・・。

女2 え？（見る）

男2 ほら・・・せつちゃんが・・・手ふってる・・・。

女2 ・ ・ ・ほんと・・・かんちゃんが手ふってる・・・。

むこう岸を、じっと見つめるふたり。

男2 ・ ・ ・迷信だよね・・・。

女2 え？

男2 だからさ・・・もうひとりの自分を見ると・・・。

女2 ええ・・・あたしもそう聞いた・・・。

男2 え？

女2 だから・・・迷信だって・・・。

男2 うん・・・。

女2 カンちゃん・・・春だね。

男2 うん・・・。

女2 楽しい・・・春よね・・・。

二人微かに微笑み、むこう岸に、ゆっくりと手をふる。

音楽。

暗くなる。

テーブルの上の緊急ボタン、点滅しはじめる。

第三話

トランクライザー（精神安定剤）

暗闇の中から、ピコピコ・・・というめざまし時計の音が聞こえてくる。

溶明

男3（小学二年生）、むっくりと起き上がり、傍らの電話の受話器をとり

男3  
ママはいません僕はわかりません。ママはいません僕はわかり・・・（ふと、時計が鳴っているのに気づき、止めて、あたりを見回す）・・・ママ・・・ママ・・・。

しいん・・・。

男3  
ママ・・・お・・・お薬・・・は？

男3、あたりを探す。

歌声が聞こえてくる。

男3  
？・・・

女3（声）  
♪ガンダーラ、ガンダーラ・・・。

女3（小学三年生）やってくる。  
箒を二本肩にかついでいる。

女3 (明るく) こんにちは。

男3、ビクツとする。

女3 はい(ト、男3に箒を渡す)ガンダラーガンダラー・

(ト、口づさみながら掃きはじめる)

男3 (ぴくつと身震いして女3を見る)

女3 ♪ガンダラーガンダラーあいのくにガンダラー・。

男3 (女3のところにツカツカとやってきて)や、や、やめ

ろよ、その歌。

女3 え？ガンダラーって歌よ。

男3 し、知らないよッそんなの。

女3 (むっとして)ねえあなた、茜小の子じゃないでしょ。

男3 え・・・？

女3 ねえ(ト、腕をつかむ)

男3 (慌ててふりほどく)

女3 児童館にも来てないでしょう。子供会にも入ってないよ

ね。

男3 う、うるさいなッ。

女3 学校行ってるの？ね、ね。

男3 放せたらッ。

女3 登校拒否児童？

男3 私立ッ。

女3 え・・・。

男3 僕、私立。

女3 ……(なんとなくイジツとなってしまう)……い

「ばっちゃって……私立がなによ……♪ガンダーラ、ガン

ダーラ……。

男3 やめろったらッ!!

女3 (ギョツとして) な、なによッ。

男3 (ひきつって) こ、こ、ここんどこ(頭)き、きいっ

てするッ。

女3 (唾然として)……あなた、病気……なの？

男3、わなわなとふるえながら、ポケットや、あたりを  
探す……が探しもの、見つからない様子。

女3 どうしたの？

男3 く、くすり……。

女3 え？薬って、もしかすると白い袋に入ってるやつ？

男3 そう。

女3 さつき、捨てちゃった。

男3 ええッ!?

女3 大事なものだったの？ でも、からっぽだったけど。ご

めんね、川上俊一郎くん。

男3 え……。

女3 袋にそう書いてあった。

男3 ひ、ひとの名前、勝手に読むなよな。

女3 ……あなた、なんの病気？

男3 言えない。

女2 え？

男3 人にはいつちやいけない病氣。ママがそう言ったもん。

女3 ふうん。

女3、掃く。

男3 ・・何してんの？

女3 お掃除よ。

男3 なんで、掃除なんかしてんだよ。

女3 子供会よ。

男3 子供会？

女3 そうよ。子供会できまってるの。地域美化活動っていうのよ。あんたは私立だから知らないでしょうけど、区立の小学校に通ってる子は皆な子供会に入っているの。

男3 ふうん・・。

女3 夏休みには皆なで花火大会とか、盆踊り会もやるのよ。

あんたは私立だから知らないでしょうけど。

男3 盆踊り知ってるよ。

女3 行ったことある？

男3 ない。

女3 やっぱね。

男3 でも、音楽が聞こえてくるよ。聞いたことあるもん。

女3 そんなの当たり前よ。だって、そのの広場でやってるんだもの。あんたんち、ここのマンションなんでしょ。つ

男3 んぼだって聞こえるわよ。

男3 つんぼなんていっちゃいけないんだよ。それに、耳の不

自由な人だったら聞こえるはずないじゃない。いくらそ

この広場でやってたって。

女3 ふん。あたし、稲垣亮子。茜小の三年二組。

男3 どうして、いきなり自己紹介するの。

女3 ずるいって思われたくないから。

男3 え？

女3 あたし、あなたの名前、読んじやったから。

男3 僕、聖徳付属小学校二年A組。学校までは書いてなかつ

たから。

女3 なんだ。歳下か。

男3 聖徳って聖徳太子と関係あるんだよ。

女3 どういう関係？

男3 知らない。けど、パパが言ってた。

女3 聖徳太子が出た学校なの？

男3 ううん。聖徳太子で入れる学校だって。くく・・(ト、

笑う)

女3 (ウケない) ふうん・・。

男3 ねえ・・いつも掃除してる？

女3 ううん。第一と第三日曜だけ。

男3 第二と第四は？

女3 別の子。

男3 なんて子？

女3 桜井くんの子だけど、あなた、知らないよ。

男3 うん・・・知らない・・・。

女3 はい（ト、箒をわたす）あんたも掃きなさいよ。頼まれ  
たんだから、あたし。

男3 え・・・？

女3 あんたを、子供会の地域美化活動に誘ってやりなさいっ  
て言われたの。

男3 誰に？ ママ？

女3 ううん。

男3 じゃ、君のおかあさんが君にそう言ったの？

女3 うちのおかあさん？（ぷつと吹き出して）おかあさんは  
区のボランティアに参加してるよ。恵まれないお年より  
の力になってあげてるんだって。

男3 あ・・・それ、もしかする僕んちのママとおんなじ。

女3 あらそお？ くだらねえよな、あれ。

男3 え・・・？

女3 自己満足？・・・ってのだと思うんだよな。うちのおかあ  
さんなんて、すっごく面倒臭がつてんの。ほんとはやめ  
たいらしいよ。年よりって心の曲がったのが多いから、  
面倒臭いわりには感謝されないしとか言ってるやがんの。  
ざまーねーな。けけけ。

男3 君って・・・すごく・・・言葉悪い・・・ね。

女3 そうかい。時々、やってみるんだけどさ。でも、言葉は  
悪くたって、ハートはいいよ。あたしはねー、おかあ  
さんみたいに感謝とかされたいなんて思ってるないし。自  
分のこといいひとだって思いたくってお掃除してるんじや

ないしー。

男3 うちのママは、ちゃんとやってる・・・と思うよ。

女3 ほんとお？

男3 うん。あっちこっち出歩いてて、家にいることなんてめ  
ったにないもん。今日はボランティアじゃなくて、結  
婚式だけど。

女3 へー。じゃ、あんた、いつもひとり？

男3 そう。

女3 私立じゃ近くにダチもいねーだろーに。

男3 ・・そういう言葉遣いって・・・楽しい？

女3 まあ、気晴らしにはなるね。

男3 ふーん・・・。

女3、掃く。

男3 掃除・・・も楽しい？

女3 まあね。

男3 ふうん・・・。

女3 なにしてんの？ちゃんとお掃除やってよね。

男3 ・・・。

男3、ちゃんとやる。

女3 (掃きながら) 昔はさあ・・・。

男3 え？

女3 子供が石を積んだんだって。親不孝したからって。ひとつ積んでは父のためえー、ひとつ積んでは母のためえーとか言っつて。暗い暗い。

男3 ……ねえ……。

女3 ん？

男3 ほんとに薬の袋……からっぽだった？

女3 うん。全部飲んじゃったんじゃないの、あんた。

男3 ……。

女3 ♪ガンダーラ、ガンダーラ……。

男3 ね、ねえッ。

女3 え？

男3 その歌うたいながらじゃないと、掃除できないの？

女3 まあね。ノリがいいってのかな。

男3 ……。

女3 ♪ガンダーラガンダーラ……。

男3 ね、ねえッ。

女3 なによ。

男3 ぼ、僕、病気なんだ。薬も飲んでるんだ。ノイローゼっていうの、内緒だけど。

女3 (急にぱっと顔を輝かして) あ、ウチのおかあさんもなつたことある。

男3 え……君のって……ボランテイヤやってるおかあさん？

女3 そうよ。へえ、子供もなるの。

男3 うん……よくわかんないけど……。

女3 そうか。それで人にいっちゃいけないっていわれてるの

ね。気違いの一種だからでしょ。

男3 (ギクツとして) ち、ちがうよッ。き、きちがいとかい

つちやいけないんだよ。

女3 なんで？ うちのおかあさん、それになった時、気イ

るった気イくるったって騒いでたよ。

男3 ・・・びよびよだよ・・。

女3 え？ ひよこ飼ってるの？

男3 ち、違うよッ。頭がびよびよだよッ。き、気違いなんか

じゃないよッ。

女3 ・・・。あんたってへんなの。

男3 え・・どして？

女3 だって、ガンダラーで頭きいってなったり、つんぼも

きちがいもダメとかって言うし。あげくの果てにびよび

よでしょ。ほんと、病気なのね。

でも、治るんだよ、ちゃんと薬飲めば。

女3 そうなの？

男3 そうだよ。ママだって佐伯さんだってそう言ったよ。

女3 さえきって誰よ。

男3 病院の看護婦さんにきまつてるじゃないか。ママのお友

達でもあるんだよ。知らないの？

女3 そういうところが、へんなんだよなあ、ものすごく。

男3 え？

女3 あんたの知り合いなんて、あたしが知りっこないじゃな

い。

男3 ・・・僕・・薬、飲みたい・・。

女3 ごめん。捨てた(掃く)

男3 ね、ねえッ、葉ッ。葉だってばッ、亮子ちゃんッ。

女3 わッ、二度びつくり。

男3 どうしたの？

女3 いきなり亮子ちゃんだもん。

男3 だって、稲垣亮子って、さっき言ったじゃないか。

女3 言ったけど・・・。

男3 なら、やっぱり亮子ちゃんじゃないか。

女3 あんたにそう呼ばれると、あたしちよつとへん。

男3 へんって？

女3 わかんないけど、なんかへんな感じする。

男3 どうして？

女3 どうしてでもッ。へんはへんなんだからッ。

男3 へー。君だって病気だー。

女3 ちがうわよッ。あたしは、どっこも病気なんかじゃない

わよッ。

男3 病気だよ、そういうの。

女3 なんですよ。

男3 僕も前はそうだったもん。

女3 前はって？

男3 ほらさ、大人って、子供にナレナレしいだろ。会ったば  
っかりなのに、俊一郎くんとか俊ちゃんとか言っちゃつ  
て。僕、そういうのすごくへんな感じだったの。怖いみ  
たいな感じもした。だから、返事しなかったの。そした  
ら、病気って言われたんだ。

女3 そういあの病気？

男3 そう言ったよ、大人は。でも、びよびよ同士はちがうんだ。

女3 だからッ、何さ、そのびよびよって。

男3 頭びよひよのぼくうーっ言ったんだ。

女3 誰が？

男3 隣りのおじさん。

女3 いきなり？

男3 そう。俊ちゃんとか、俊一郎くんとか言わないで、いきなりそう言ったんだ。

女3 へんなやつ・・・

男3 違うよ。僕、その時、びよびよって応えたもん。ずっといいんだ、その方が。ナレナレしく呼ばれるよか、その方が全然いいんだ。それなら僕、ちゃんと応えられるんだ。でも、病気だって、ママは言うのさ。薬飲めって。

女3 それで、薬飲んでるの？

男3 そうだよ。

女3 そしたら、へんじゃなくなったの？会ったばかりの大人に、いきなり、ナレナレしく呼ばれても。

男3 ううん。

女3 じゃ、治ってないんじゃない。薬、効いてないんじゃない。い。

男3 だからッ、もっと一生懸命飲まなくちゃいけないんだ。たくさんたくさんガンガンッ。

女3 ...やっぱり、飲んじやったんだ...

男 3

・・・

女 3

そうか。それで、さつき、あたしが川上俊一郎くんって  
言ったら、怒ったのね。

男 3

それは違うよ。それは、僕の名前を君に知られてるって  
ことを、僕が知らなかったからだよ。

女 3

・・・よくわかんない・・・

男 3

そういうのは嫌な感じなんだ。大人もそうだよ。

女 3

・・・大人は、自分の名前を知られてるってことを知ら  
ない時、呼ばれるの嫌なの？

男 3

そうだよ。ギクッてるんだ。

女 3

そんなの子供だって同じよ。ギクッてるじゃない。で  
も、あれえ、なんであたしの名前知ってるの？って聞く  
でしょ？

男 3

そういうこと聞かれたことないけど。

女 3

それより、子供は、よく知りもしない子のことを大人み  
たいにナレナレしく呼んだりはしないよ。名前はわかっ  
ても、始業式の日からいきなり呼んだりしない。学校  
でも、クラス変えがあつた時なんか、皆な暫くは、前一  
緒のクラスだった子とばかり話したり遊んだりしてる  
のよ。そのうち、仲良くなるけど。でも、ちゃんづけで  
呼ぶのなんて、たいていその頃からよ。私立は知らない  
けど。・・・ねえ、私立の子って皆な、ナレナレしく呼ば  
れてへんな感じになるのを、薬飲んで治してるの？

男 3

じゃない。

女 3

ふうん・・・

女3、ばさばさと掃く。

男3 ねえ・・亮子ちゃん。

女3 近寄らないで。病気、うつるかんじするから。

男3 うつんないよ、僕の病気は。

女3 そ、そんなのわかるもんかッ。あたし、ここ(頭)へん  
になってきたみたいだものッ。

男3 えー、亮子ちゃんもー？

女3 近寄らないでってばッ。ぶ、ぶつからッ(ト、箒をふり  
あげて、ハアハアする)

男3 ・・・薬、飲むと治るのにな。

女3 (掃く)

男3 (得意気に)あの薬飲むとね、心臓のあたりが、ゆたあ  
ーって感じになるんだ。

女3 ゆたあーって何？

男3 ゆたあーつはゆたあーだよ。ちよつと眠くなるみたい  
な  
感じ。

女3 そ、そんなもん、子供が飲むもんじゃないもん。

男3 えー、だって僕は飲んでるのに？

女3 でもいやッ。・・あ・・なんだか、ゲロゲロしなくなっ  
てきた・・。

男3 やっぱり、あの薬、飲んだ方がいいよ。ねえ、どこに捨  
てちゃったのさッ。

女3 からっぽだったって言うてるでしょ。あ・・うつ・・。

男 3

・・なにさ？

女 3

ゲロゲロしていい？

男 3

えッ？

女 3

ゲロゲロ。

男 3

やだよッここでやっちゃやだよッ。あっちでやってよ。

女 3、去る。

男 3

・・なんだよ、ゲロゲロなんて・・。どうしてゲロゲロしたくなつちゃうんだよ。あいつの方が、よっぽど、病  
気じゃないか・・。

めざまし時計、鳴る。

男 3、止める。

女 3、やってくる。

女 3

(ビニール袋に入った薬を見せて) 薬ってこれ？

男 3

(飛びつき) ・・違うよッ。白い袋に入ってるやつ。ち  
ゃんと川上俊一郎さまって書いてある・・。こんなの、  
ただのドロップじゃないか(捨てる)

女 3

捨てちゃった・・。ノイローゼの薬。いーっぱい。

男 3

ねえッ、どうして捨てちゃったんだよッ。

女 3

だからッ、からっぽだったって言ってるでしょうッ。ば  
つかみたいッ。

男 3

僕、薬飲まなきゃいけないんだッ。飲まなきゃ、いつま

でも、ぴよぴよなんだッ・ぜんぜん・治らないんだ  
・だから、僕、ちゃんと飲んで・それでぴよぴよも  
はやく治して・決められたとおりに飲んで・  
あ・  
どうしたの？

女3

ぜんぶ・のんだ・。

男3

え？

女3

薬・袋の薬・全部・飲んだ・いっぺんに・。

男3

でしょ。からっぽだったもん。やっと思いついたの？

女3

こ・ここ・、何処・？

男3

マンションの地下。

女3

地下？・ぼ、僕んちの・？

男3

そうよ。決まってるじゃない。さ、お掃除しよ。

女3

・  
・  
・。

男3

男3、ふと奥の方に目をとめ目を凝らし近づいていく。

どうしたの？

女3

・  
・へんなものがある・。

男3

え？なに？

女3

(女3のところに駆け寄ってきて) し、し、死体・。

男3

死体？

女3

・  
・みたいなもの・。よく見なかったけど、半分、溶  
けてるみたいだった。

男3

女3 なに、それ。

男3 虫・・・。

女3 えッ？・・・

男3 みたいだった・・・。

女3 虫？

男3 うん・・・。でも、なんだか・・・びよびよのおじさんに、

似てるような感じも・・・。

女3 ・・なんだ・・・。

男3 なんだって？

女3 そんなの沢山あるわよ、ここには。

男3 ええッ!?

女3 ゴキブリの死骸だっただけあるし。知らなかった？・・・でも

あたしはチロを待っているんだけどね。

男3 チロ？

女3 そうよ。犬よ、あたしの。なんだ、人間か（再び箒を持

って掃き出し）ガンダーラガンダーラ・・・。

男3 に、人間じゃないよッ。虫だっただけ。

女3 だからッ・・・わかってないのよねー。♪ガンダーラ、

ガンダーラ・・・。

男3 （ぶるぶる震えて）ぼ、僕、葉・・・飲みたい・・・。

女3 全部飲んじゃったんでしょッ。

男3 こ・・・ここ、何処だよッ!?!?・・・出してッ、出してよッ。

女3 （ふんつとして）ガンダーラガンダーラ・・・（ト、行っ

てしまう）

男3 ママッ、ママッ!

B 1のランプが点滅する。

男 3

B 1・・・地下・・・？・・・僕んちのマンション、地下なんて、なかった・・・！！・・・ママッ！！

女 3

(やってきて) 見て見て (ト、枯れ葉を二枚見せる)

男 3

え・・・？

女 3

落っこちてたの。

男 3

それがどうしたのさッ。

女 3

収穫収穫。本日の収穫。

男 3

どうして、そんなもんが収穫なんだよッ。

女 3

え？

男 3

ただの枯れッ葉じゃないかッ。

女 3

・・・ひどい・・・。

男 3

なにがひどいんだよ。君、ここ(頭)パーなんじゃないの。

女 3

全然わかってないみたい。

男 3

なにがだよ。

女 3

これ、おじいちゃんとおばあちゃんよ。死んだおじいちゃん

やおばあちゃん・・・。

男 3

え・・・。

女 3

あんたみたいに、私立になんか行ってる子にはわかんないよね。この世で、いっとう大切なものは、犬と枯れ葉

よ。

男 3

そんなのッ大切なもんかッ。

女3 「じゃ、なによ。あんたはなにがいつとう大切なのよ。

男3 「・・・僕は・・・。

女3 「ほーら、わかんないじゃない。最低ね。私立だもんね、しよーがないか。

男3 「私立私立ってなんだよ。区立よか、私立の方が偉いんだぞ。

女3 「さいてー。

男3 「ママがそう言ってたもん。区立は誰でも入れるけど、私立に入れるのは選ばれた子だけだって。

女3 「（きつとなって）あんたなんか病気よッ。

男3 「薬、飲んでるもん。薬飲めば治るって、佐伯さんも言っ  
たもんッ。

女3 「あたし、知らないもの、そんな人。

男3 「佐伯さんはサエキさんだよッ。ばかやろうッ。

女3 「あんたってほんとかわいそ・・・。犬、いなかったのね。

男3 「い、いないよッ。マンションで禁止されてるもんッ。

女3 「おじいちゃんもおばあちゃんも・・・。

男3 「マンションで飼っちゃいけないんだもんッ。

女3 「誰も・・・だあれも待つ人がいないのね。ひとりで行かないよ。あんなにのね、あんた。

男3 「行く？・・・どこに？

女3 「そーか。それでお掃除に誘ってあげなさいって・・・あ  
たし本当はお掃除しながらチロを待ってる予定だったん  
だけど、仕方ないね・・・よし、あたし、あんたと一緒  
に行ってあげる。

男3

・・ぼ、ぼく・・薬・・飲みたい・・。

女3

ねえ。ぐずぐずしてると誘ってあげないよ。掃除当番も

花火大会も（去る）

男3

亮子ちゃんツ。

男3、あたりを見回す。

男3

・・ママ・・ママ、何処？

チンツと音がして、エレベーター、ガーッとドア開く。

女3

行こ・・。

男3

え・・・？

エレベーターの中には上の方からぼんやりと明かりが差し込んでくる。

女3

行こ・・。

男3

・・行く・・？

女3

（うなづいて）もう、薬なんて飲まなくなつて平気よ。

誰もあんたのことナレナレしくなんて呼ばない。名前なんてないもの・・。

男3

え・・？

女3

あのね・・人間は・・。あのね、もっと正常よ・・。

あなたも信じなさい・・。

女3、男3を静かにみつめる。

男3、ゆつくりとエレベーターに乗る。

男3

ママ・・・亮子ちゃんが呼んでるから・・・行くよ。お菓は

・ちゃんど時間どおりに飲んだから・・・。全部・・・

全部、飲んじゃったんだ・・・。

女3“閉”ボタンを押す。

上昇していくエレベーター・・・10階・・・。

エレベーターランプ、ふいにポツンと消える。

幕

┌

(初演キャスト)

男1 高橋克実

男2 松本きょうじ

男3 手塚とおる

女1 重田千穂子

女2 西山水木

女3 広岡由里子